



Title	懷徳堂を思ふ
Author(s)	阪倉, 篤太郎; 岡崎, 精郎; 八木, 毅 他
Citation	懷徳. 1953, 24, p. 68-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90266
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂を思ふ

懷德堂の焼亡

阪倉篤太郎

忘れもしない昭和二十年三月中旬、米機の大阪初空襲によつて、懷德堂は焼亡した。京都に住むわたしはラジオなどでこの空襲の事實は知つたが、詳細の報道は傳はらなかつたので、實際の被害がこれほどとは思つてゐなかつた。ちやうど翌日が講義日に當つてゐたので、午後五時頃來阪して天神橋六丁目で京阪電車をおりたが、市内電車の不通のために餘儀なく徒歩で、まだ餘燼の消えやらぬ天神橋筋を通つて、その慘狀に先づ度膽を抜かれた。然し勇を鼓してあるきつゞけてゐる中も懷德堂の無事を祈りつゝ來て見ると、やはり一面の焼野原で倉庫のみが淋しく残つてゐた。わたしはひとり呆然と暫く佇んでゐたが、日が暮れては道に這つてゐる電燈線などの危険があるし、用心もわるいので急いで天満橋の京阪電車乗場に來たが、構内一杯の乗客で——郊外の住宅へ歸る人ばかりでなく新たに避難する人も多かつた——なかなか乗車できさうで無いと思つたから、天神橋六丁目の新

ふ

京阪電車乗場へまはつてやつと歸浴した。

かういふわけでこの日の印象は極めて深いのであるがしは毎週一時間づゝ國文學書——古事記・枕草子・萬葉集など——の講義を擔當してゐたが、元來大阪は生れ故郷である關係から、懷德堂の事業に微力を盡す喜びは極めて大きく、終戦後も毎月一回づつではあるが、焼残つた倉庫で講義を續けて今に至つてゐるのは、まことにわたしの本懐とする所である。今度いよくこゝから移轉することになつて、特にわたしは幼時の思ひ出の多い昔の博物場跡を去るに臨んで、一層感慨無量であるにつけて、今後も當事者の方々の驕尾に附して、懷德堂書院開設當初の面目の失はれないやうに努力し、少しでも郷土文化の向上に寄與したいと念願して已まない次第である。

懷德堂思出の記

岡崎精郎

筆者は大阪森宮で幼時を過したので、父母に伴われ

て懷德堂へしばしば行つたさうである。その頃内本町寄りの方はこんもり茂つた大樹におおわれた庭園で舊昔の大阪の町の「時の鐘」など置いてあり、二三の鳥類も飼つてあつて子供が遊ぶに頃合な小公園風にしつらわれてあつた。

懷德堂考の著者西村天因先生の御居宅は森宮西町にあつた。筆者の家は坂の上、先生のお家は坂の中程で半町も距ててはいなかつた。先生の御病氣とかで御見受する日はなかつたが、切り下げ姿の御母堂がよく散歩して居られた。えらい學者だときいて、その格子作りの昔風のお家を一種の崇敬の眼で眺めたものであつた。

その頃懷德堂では幼い子供にも何か個人教授的な機關を持つていたらしいが、子供の足では少し遠くて通えなかつた。祖母が漢學者の娘で、幼いものによく唐詩選の詩を口授してくれていたので、殊更西村先生に關心をもつたのである。終戦直前八月十四日、森宮一帯は戦火に全滅してしまい、現在は野球場となつて昔を偲ぶようすがない。

學問の殿堂懷德堂として筆者が親しんだのはずつと後年になる。忘れもせぬ高校生活を終え、大學に進まんとして、一生の志望が漸く決した頃、懷德堂で月々靜安學社の例會に出席するやうになつてからである。社の同人

懷德堂を思ふ

で筆者の恩師西田長左衛門先生の御縁で石濱純太郎先生に始めて御面識をえて「サイニング氏のトカラ・エンギ考」を拜聴してより以來、月々の例會に參じたものであつた。室に夕闇が立ちこめるまで和氣あいあいの中に語る人、またこれに聴きいる人々、あの雰圍氣は誠に忘れ難いものがある。

(昭和二十八年夏、筆者は阪大助手)

東横堀河畔

八木 毅

浪花橋筋は堺筋の西側を、北の船場から島の内へと南に通づる道筋で、その平野町に私の父は、木造ビルの三階を借りて、死ぬまでの長い間、しがなない齒科醫稼業をして暮しをたててゐた。

私が懷德堂へ父に連れられて、はじめて素讀科の束修料を納めにいつたのは中學二年、ちようどういま時分のさわやかな秋の日の夕暮時だつた。

小學校を卒へる頃、私は父から孟子の素讀をうけたが今から考へてみると、あれは父自身讀書に一つの便宜をうるために、私を利用したんぢやなかつたかなどとも思つたりしてゐる。とにかく、父との勉強は、晩寝早起きだつた父の、朝の行事の一つとして一年餘り續いたが、

その後父が健康を害したりして自然やめることになつてしまつた。

學校の歸り道に平野町によつて、そんな父の一日の安否を見るのが、私の中學時代の日課のやうになつてゐた。私が懷德堂に通ひはじめたのはあの頃の、私たち父子のかうした生活が反映しての結果だつた。

當時、懷德堂には支那古典を講ずる定日講義といふのにならんで、文科講義と稱する國文學の講義も行はれ、土曜日には自然科學などの啓蒙的な講義が開かれてゐた。何時も六七人から多くて三十人位の聴講者があつたやうに思ふ。それらにも私は二三度でみたが興味がもてなかつたので、素讀の終つたあと、六時か七時頃から始まるさうした講義につらなることもめつたになかつた。

素讀室は講堂の東北の隅に狭く作つた部屋だつた。もともと講師の控室に作つたのだつたさうだが、それでも三四坪はあつたらうか。その部屋には今では何の本だつたか覺えないが、漢籍がうづ高く積まれてゐて本の匂ひのするそのほの暗い感じを私は好んだ。私の先生は戰爭中に亡くなつたときいたが當時助教だつた吉田銳雄先生であつた。先生の火・木・土の素讀にでるのは大體私と同年輩の中學生が三人と、いつも白いリボンを結んで髪

を三つ編みのおさげにした少女と五人だつた。その五人が、行つた順に先生の前に正坐して讀み終れば歸るのだから、その可愛い少女と一緒に歸れる日はついぞ一日もなかつた。

學校の歸り道で平野町の父のところにかバンをなげ込むと例の朱註の論語を道々下よみしながら、大抵は平野橋か大手橋かを渡つて通つた。時にはわざと本町橋に廻り道をして下讀みの時間をかせいだこともあつた。

吉田先生はもの靜かな落ちついた口數の少い方だつたが、私たちが先生の前の席について讀んでゐる間ぢやう、先生は向ふ側からさかさに私たちの本をみてをられるか、ちつと目をつむつたまま、腦裡に字面を追つてをられるかしてをられた。

中學を終へた私は、父の郷黨で、遠い縁者の山田濟齋先生が學長をしてゐた二松學舎に進んだ。濟齋先生の父、山田方谷は、若くして懷德堂の丸川松隱に學び、後陽明學に轉じたのだときいたことがあつた。私が東京へゆくやうになつてからも、休暇のたびに東横堀川畔の懷德堂に吉田先生をお訪ねするのは楽しみであつた。

堺筋は商業の町大坂の中心であつたが、平野町からその堺筋を横切つて眞直ぐ東へ大坂城に向つてゆく中間に、石菴先生の學德をしたふ所謂門下五同志の富豪町人

の手によつて建てられた懷徳堂が移つてきてゐたといふことには、大きな意義があつた。

元來は私學であつた筈の懷徳堂であつたが、その建學のはじめから古學派を斥け、明治二年に一旦廢校になるまで百五十年の間、時の権力と緊密に連繫して官學的な色彩をもつてきたらしい點にも、大阪らしい特徴があるやうに思ふ。

最近の寶塚プロダクションの作品に「かつば」を扱つた映畫があつた。近代企業がその利潤と便宜とのために自然美をも假借なく崩してゆくことを、哄笑のうちに諷刺したものであつたが、いまや懷徳堂の由縁深い校地は、あの東横堀川畔から追ひたてられやうとしてゐると聞く。

懷徳堂はあの場所にあつて権力と財界との調和を大阪らしく象徵してゐたと思つてきたが、町人の學問所懷徳堂が、あの場所を失ふといふことは、その建學のころを失つてしまふことになるかも知れない。

人間はつねにその心を示すのにびつたりしたシンボルを求めるものだが、かうした意味で横堀川に面した豊後町のあの土地を懷徳堂が失ふといふことに、一抹の哀惜を禁じえないものは、果して私ひとりであらうか。

(筆者は阪大助手)

懷徳堂を思ふ

懷徳堂は何處に行くか

山村 太郎

いよ／＼懷徳堂が現在の敷地から移轉しなければならぬ時が來たと云ふ話である。戰災に遭遇して其後今日まで、講堂の再建は遂に實現せず、戰災を免れた書庫の藏書は、これ又大阪大學に寄贈された今となつてみれば、空の書庫のみが残されたこの敷地から離れて行かねばならない運命にあることは、むしろ當然なのかも知れないが、何等かの意味で懷徳堂を知るものにとつては、實に淋しい極みと云はなければならぬ。名實共に既に存在しない懷徳堂なのであると、斯う云へば或はお叱りを受けるかも知れないが、そのかみ享保年間から大阪の町人文化に大きな寄與をしたこの學問所が、いよ／＼四散してしまうことは、思へばこれも亦時代の趨勢とは云へ、殊に多少の因縁を結ぶ私としては全く感なきを得ないのである。因つていさゝか追憶を許して頂きたい。

「懷徳堂遺書」と云ふ十六冊の和本が、今は戰災で烏有に歸した土藏の中の古風な本箱の一つに仕舞はれてあつたことが思ひ出される。それは中學生の頃のことであつて、もとよりその本が讀めるものでもなく、「論語逢原」

が何であるやら知らうともしなかつたのであつた。後、學を國文學に志し、こゝに初めて懷德堂なるものを知るを得たのである。卒業後大阪府立圖書館に勤務することになり、時の館長今井氏が懷德堂の理事であり、又寄托本中には懷德堂關係の圖書が多數保管されてをつたことから、時にそれらを親しく手にする機會もあつたわけである。即ち中井木菟麿氏の寄托本、有不爲齋伊藤氏の寄托本等がそれであつた。其後これらは寄托者の手によつて中井本は悉く懷德堂に寄贈され、伊藤本は賣立に出されたが、一部は懷德堂に贈られたかと思ふ。そして今又これらの藏書が總て阪大に移されてゐる。私としては何年振りかでこゝに再び巡り逢ふ奇縁と云ふことになつたのである。府立には當時中井家本と共に懷德堂諸先賢の藏書印が保管されてゐた。或る日、私かに「懷德堂印存」に摸して、畫仙紙を求めて自らこの先賢の藏印を一つ一つ捺印し、印譜一部を作り上げたことがあつた。竹山、履軒、蕉園、碩果、杣園、桐園の諸印類、或は石材、或は銅材のそれらを手にしては、當時の先賢にじかに接するの思ひがして、非常な感激をもつて捺印したものであつた。このときの悦びを吟じた歌稿もこの天下一本の手製印譜も、専門の國文學書と共に昭和二十年三月十三日敢へなくも灰燼に歸してしまつたのである。懷德堂も私

と同日の罹災でこれ又因念つゞきとも云ふべきか。然しこの諸印類は中井家が懷德堂に譲らなかつたと聞くから今日も尙同氏の手元に秘藏されてをるものであらう。慾を云へばこれを機に阪大に寄贈を受け、永く手稿本等と共にあらしめたいと希ふものである。

萬葉に於ける契沖の圓珠庵復興は、平林先生を中心として我々國文學關係者よりなる、「契沖阿闍梨顯彰會」なるものが組織され、その再興に努力しつゝあり、洋學に於ける適塾が戰火を免れて、その史蹟は現存し、國文學に於ける圓珠庵はその再興に顯彰會を起し活動するとき、ひとり儒學の懷德堂のみが顧みられず、その去就に迷ふ状態とは實に残念な極みではないか。いづれも共に近世大阪に深い關係をもつ偉大なる先賢である。その先賢顯彰の意味からしても、亦大阪文化の面目にかけても、懷德堂の復興運動は何等かの方法に訴へなければならぬのではないか。

昔日竹山、履軒其他の書を講じた懷德堂としての舊蹟は、今は日本生命の敷地となり、せんすべもないとすれば、敢て史蹟を求めなくともよい。諸賢の精神はその手澤ある圖書は、その自筆草稿の冊子に求むべきであらう。講堂の復興は種種の事情により遂に止むを得ないとすれば、ゆかりあるその名を如何にして保存すべきか。

残されたものは戦災に免れた貴重な圖書あるのみではないか。そしてその圖書は先賢の精神の範る器である。この圖書のあるところ以外にその名を傳へる場所はない筈ではないか。圖書あつて初めて懷德堂の名も實も共に具はるものではないか。

既に適塾が阪大に屬してをる今日、こゝに又懷德堂の遺書を迎へた阪大として、私は、私かに大阪大學にその主旨に添ふべき何等かの方法を講じさすべきではないかと思ふものである。日本の文化史上に偉大な貢獻をした近世の三大學者の二人までが、我が阪大に直接の關係を結んでゐると云ふことは、大學としての名譽でなくて何んであらう。

八月の十日は西鶴の忌日であるこの日展墓するを例とした私は、奇しくも同じ埜域に眠る中井家の墓にも手向を忘れない。浮世主坊の西鶴、道を論ずる竹山履軒、大儒と大藝術家、硬軟墓石を隣りすることも亦私に不思議な關係を結ばしめてゐるのである。(八月十五日終戦記念日の夜)

(筆者は阪大法經文學部圖書分館主任)

懷德堂を思ふ

懷德堂の將來を望む

木村英一

先日懷德堂の同顧座談會に御招きを受けたが、病氣の爲め出席出来なかつたので、こゝに誌上の餘白を借りて一言感想を述べよう。

私は先年大阪大學に赴任して、始めて懷德堂から寄せられた書物を一見した時、強く心をうたれるものがあつた。先賢の著述の原稿や手澤本等の貴重な記念品については今はしばらく措くが、西村天囚先生以後に集められた數萬冊の文庫には、別段珍本とか善本とかいふ種類のものは無く、大體に於いて學問の常道に沿うた有用の書物ばかりである。しかしそこにこそ先輩達の眞摯な心構への程が現はれてゐて、まことにゆかしく思はれた。そして遠く思ひを先賢師儒の偉大な足跡の上に馳せ、更にそれ以後今日に到るまで、時運の幾變遷を越えて綿々とつゞけられて來た人々の努力を思つて、いたく感激したのである。

時恰も懷德堂は、戦火の後をうけながら、その不屈な傳統的精神を體して、關係人士によつて、その將來の復興方針が議せられてゐたのであるが、たまたま私も亦そ

の議の一端に與る光榮を荷ふ事となつた。そして合議の末、先づ春秋二回の講座が開設されることとなつた。これは周知の如く一昨年の事であるが、こゝに至つて、彼の戰災直後の困難を冒して克く薪火を傳へて下さつた阪倉先生の萬葉集の講義と並んで、更に一燈を挑げることが出来たのである。しかし言ふまでもなくこれは出發の第一歩に過ぎないのであつて、跣歩を積んで千里の遠きを致すことは今後の問題でなければならぬ。

思ふに我々は今や我國のみならず、世界の未曾有の大轉換期に立つてゐる。従つて何事につけても、好むと好まざるとに關らず、從來の形式を改めねばならない様な場合が多々生じるのであるが、そこには誠に己むを得ぬものがある。しかし思ふに傳統を承ぐとは、單に從來の形式そのまゝを保存することではないであらう。たとひ過去に於いて如何に善いものであつたにしても、苟も時代の實狀に合はなくなつた形式を墨守することに終始するならば、それはかへつて眞の傳統を亡ぼす事に外ならない。むしろ如何なる場合に當つても、眞摯な努力を繼續して事に善處して誤らないといふ不撓な心構へこそ、我が先賢の教へられた精神ではないであらうか。私はむしろかゝる精神の中に、懷德堂の傳統の眞の姿を見るのである。

竊に古人の遺訓を味ふに、「學問とは寸時も止めてはならないものである」といふことが大前提となつてゐる様な氣がする。もとより學問や道義の事は永遠の問題であつて、どこまでも遠大ではあるが、しかしそれと共に、かへつて常に手近な不斷の努力そのものゝ中にある。従つて常に苟もしない態度で生活し、常道によつて事に善處することこそ大切なのであつて、必ずしも性急に外見上の効果を求めることに引かれてはなるまい。恰も水の涵すが如く、「科に盈ちて然る後に四海に至る」底のものであらう。私はむしろよき未來の建立の一步一步に向つて、懷德堂の傳統の眞面目を探索することに微力を致したいと考へる。堂友會の諸君をはじめ、大方の理解ある諸賢の御賛同を得るならば幸ひである。